

福井県埋蔵文化財調査報告 第189集

大 蔵 北 遺 跡

— 北陸新幹線建設事業に伴う調査 14 —

2 0 2 4

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、北陸新幹線建設工事に伴って、敦賀市大蔵地係において、平成29・30年度に発掘調査を実施しました大蔵北遺跡の発掘調査成果がまとまりましたので、報告書を刊行する運びとなりました。

大蔵北遺跡は、敦賀平野を形成するひとつである木ノ芽川扇状地の丘陵上に立地し、中世から近世に営まれた遺跡です。今回の発掘調査では、室町時代後葉から約100年に亘って造立されていた中近世墓であることが判明しました。

敦賀を含む若狭地方では、中近世墓の調査例は少ないうえ、紀年銘が刻まれた石造物も少数でしたが、大蔵北遺跡では一定数の量が確認されました。

今回の調査成果が、この地域の歴史を調べ、中近世墓研究を進める上での基礎資料として活用され、埋蔵文化財に対する理解がより一層深まることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大な御支援と御配慮を頂きましたこと、深く感謝申し上げます。

令和6年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所長 中川佳三

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが北陸新幹線建設工事に伴い、平成29・30年度に実施した大蔵北遺跡（福井県敦賀市大蔵所在）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、平成29年度は田中勝之・鈴間智子が、平成30年度は水村信行・鈴間智子が担当した。
- 3 発掘調査は、平成29年8月1日から11月30日までと平成30年8月1日から12月28日まで実施した。出土遺物の整理は、平成31年度から令和5年度まで福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 平成29・30年度の発掘調査の支援業務は、橋本技術株式会社に委託した。
- 5 本書の編集・執筆は青木隆佳が行った。
- 6 遺構・遺物の図版作成、写真図版作成は青木が、遺構の写真撮影は田中・鈴間が行なった。
- 7 石造物の実測・デジタルトレース・写真撮影は、平成31年度は北陸航測株式会社、令和2年度は株式会社平和ITCに委託した。
- 8 本書における水平レベルの表示は海拔高(m)を示し、方位は真北と座標北の両者を併用した。
- 9 土色の色調については、『新版標準土色帳(2003年度版)』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色標監修）を準拠にした。
- 10 大蔵北遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 11 調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。なお、石造物については、全て大蔵寺に返還した。
- 12 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、下記の機関・団体から指導・協力を得た。
大蔵寺 敦賀市教育委員会文化振興課 福井県未来創造部新幹線建設推進課
- 13 遺物整理は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および会計年度任用職員があつた。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 大蔵北遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 遺跡の概要	9
第1節 基本層序	9
第2節 遺構分布	9
第3節 遺物出土状況	9
第4章 遺構と遺物	13
第1節 遺構	13
第2節 遺物	25
第5章 まとめ	38

図 版 目 次

図版第1 遺跡	(3) 14号遺構 (南東より)
(1) 遺跡遠景	(4) 15号遺構 (北東より)
(2) 遺跡遠景	(5) 16号遺構 (南東より)
図版第2 遺構	(6) 17号遺構 (北より)
(1) 1号遺構 (東より)	(7) 18号遺構 (北より)
(2) 2号遺構 (西より)	(8) 19号遺構 (東より)
(3) 4号・6号遺構 (北東より)	図版第4 遺構
(4) 7号遺構 (北より)	(1) 19号遺構 (南西より)
(5) 8号遺構 (南東より)	(2) 22号遺構 (西より)
(6) 9号遺構 (北より)	(3) 23号遺構 (北東より)
(7) 10号遺構 (北東より)	(4) 25号遺構 (北東より)
(8) 11号遺構 (北東より)	(5) 26号遺構 (南東より)
図版第3 遺構	(6) 27号遺構 (北東より)
(1) 12号遺構 (北東より)	(7) 28号-1・2遺構 (南東より)
(2) 13号遺構 (北東より)	(8) 28号-3・4遺構 (南東より)

図版第5 遺構

- (1) 29号遺構 (南西より)
- (2) 36号遺構 (西より)
- (3) 37号遺構 (西より)
- (4) 38号遺構 (北より)
- (5) 1～4号土坑 (南東より)
- (6) 1～4号火葬土坑 (北より)
- (7) 石段 (西より)
- (8) 39号遺構 (東より)

図版第6 遺物

- 図版第7 遺物
- 図版第8 遺物
- 図版第9 遺物
- 図版第10 遺物
- 図版第11 遺物
- 図版第12 遺物

挿 図 目 次

第1図 大蔵北遺跡の位置図	1	第14図 遺構実測図8	21
第2図 現況測量図	3・4	第15図 遺構実測図9	23
第3図 敦賀平野の地形分類図	5	第16図 遺構実測図10	24
第4図 周辺の遺跡	7	第17図 遺物実測図1	26
第5図 基本層序	10	第18図 遺物実測図2	27
第6図 遺構配置図	11・12	第19図 遺物実測図3	28
第7図 遺構実測図1	14	第20図 遺物実測図4	29
第8図 遺構実測図2	15	第21図 遺物実測図5	30
第9図 遺構実測図3	16	第22図 遺物実測図6	31
第10図 遺構実測図4	17	第23図 遺物実測図7	32
第11図 遺構実測図5	18	第24図 遺物実測図8	33
第12図 遺構実測図6	19	第25図 石造物計測部位模式図	34
第13図 遺構実測図7	20		

表 目 次

第1表 一石五輪塔観察表	35	第7表 板碑観察表	36
第2表 五輪塔空風輪観察表	35	第8表 石仏観察表	37
第3表 五輪塔火輪観察表	35	第9表 仏像観察表	37
第4表 五輪塔水輪観察表	36	第10表 地藏観察表	37
第5表 五輪塔地輪観察表	36	第11表 記年銘のある石造物の年代	38
第6表 宝篋印塔観察表	36		

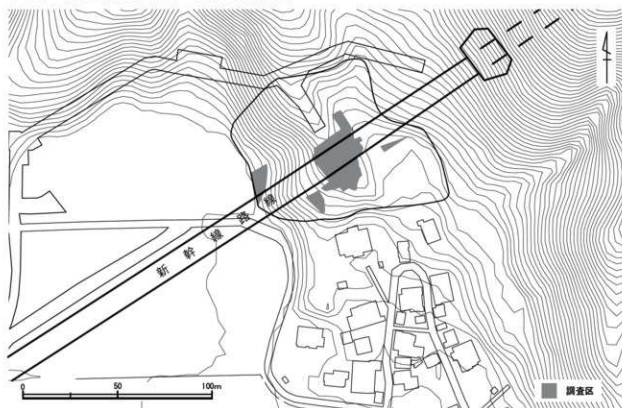
第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯（第1図）

大蔵北遺跡は敦賀市大蔵の北西側、南に延びる尾根頂部から斜面および谷部に所在し、調査前の現況は山林、墓地である。大蔵北遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地であり、中・近世の遺物散布地（福井県遺跡地図番号06137）として福井県遺跡地図に登録されている。

北陸新幹線は、東京から北陸地方を経て大阪に至る路線として国の整備計画が決定され、平成27年に長野・金沢間が営業を開始し、残る金沢・大阪間のうち福井駅部は平成17年、金沢・敦賀間については平成24年に工事実施計画が認可され、同年8月に着工された。これに伴い福井県教育庁生涯学習・文化財課（以下、文化財課）が工事の影響を受ける埋蔵文化財の取り扱いについて、事業主体である独立行政法人鉄道運輸施設整備機構（以下、鉄道機構）と福井県地域戦略部新幹線建設推進課の間で協議を行った。結果、埋蔵文化財包蔵地内において建設工事により直接的な影響を及ぼす箇所と、恒久的な工作物の設置箇所について内容把握のための1次調査（試掘調査）を実施し、必要に応じて記録保存のため2次調査（発掘調査）や工事立会を実施することで合意した。調査は鉄道機構が文化財課に依頼し、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）が発掘調査等を実施することとなった。

大蔵北遺跡の1次調査は平成28年8月29日～9月6日・平成29年1月11日および平成29年7月19・20日の3回実施した。調査はトレンチを13箇所設定し、実施した。その結果、明確な遺構は検出されなかったが、尾根頂部や東および南側斜面等に中近世の墓地群が良好に遺存していたため尾根頂部を中心とした平坦面と東側の谷部、西側斜面の平坦部の計810㎡が2次調査の対象となった。2次調査は平成29年8月～11月と平成30年8月～12月に実施した。



第1図 大蔵北遺跡の位置図（縮尺1/2,000）

第2節 調査の経過（第2図）

Ⅰ 現地調査

平成29年度

8月から開始した。まずは、調査前の現況を記録するために、草刈りや伐採した木の枝の清掃を行った。お盆明けから表土はぎを人力で開始し、その後順次遺構の調査を実施していった。11月21日に空中測量を実施し、29日に遺物を埋文へ搬出し、30日に発掘調査を終了した。

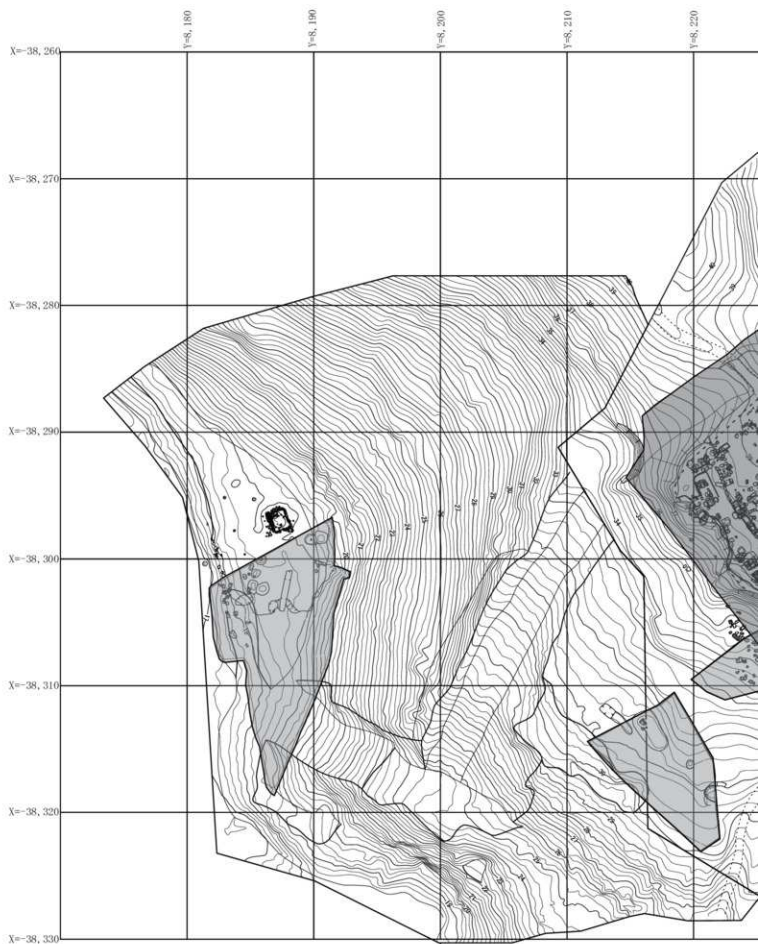
平成30年度

8月から開始予定であったが、諸事情により着手できたのが9月からである。前年同様に現況を記録する。調査区1は9月5日着手、10月10日に写真測量、調査区2は9月18日に着手、10月24日に写真測量を実施、調査区3は10月10日に着手、12月5日上層写真測量、11日下層写真測量、調査区4は11月15日着手、12月10日写真測量。その後補足調査をし、12月18日、遺物を埋文へ搬出し、28日に発掘調査を終了。

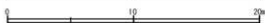
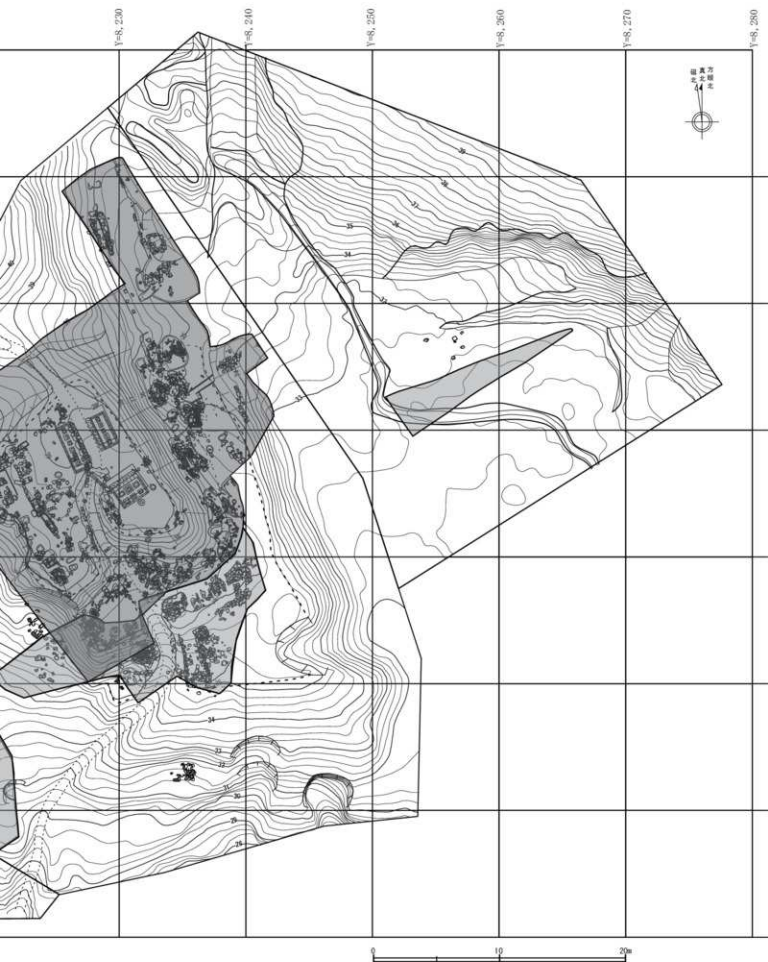
平成29年度		11日	現況写真撮影（調査区1）
8月1日	現地打ち合わせ	12日	表土掘削（調査区1）
9日	基準点測量	18日	表土掘削（調査区2）
10日	現況測量	25日	谷埋土掘削（調査区2）
22日	現場事務所等設置	28日	トレンチ掘削、集石写真測量（調査区1）
23日	作業開始	10月10日	写真測量（調査区1）
28日	グリッド測量	15日	3次元測量（調査区1）
31日	トレンチ設定掘削	23日	現況写真（調査区3）
9月5日	表土掘削	24日	3次元測量（調査区2）
13日	遺構検出	25日	現況測量（調査区3）
29日	遺構掘削	29日	表土掘削 トレンチ掘削（調査区3）
10月26日	自然石・列石撤去	11月8～12日	伐採作業（調査区4）
11月7日	墓石撮影	14日	現況写真撮影（調査区4）
13日	墓石移動	15日	表土掘削（調査区4）
21日	ラジコンヘリによる空中測量	27日	石検出作業（調査区3）
29日	遺物等を埋文へ搬出		遺構精査（調査区4）
30日	現場終了	28日	石積面出し（調査区3）
		30日	遺構掘削（調査区4）
平成30年		12月5日	写真測量（調査区3）
8月1日	現地打ち合わせ	7日	下層遺構掘削（調査区3）
8日	基準点測量	11日	写真測量（調査区3）
10日	グリッド測量	18日	遺物を埋文へ搬出
29日	事務所等設置	25日	事務所等撤収
9月5日	作業開始	28日	現場終了
6日	現況測量		

Ⅱ 遺物整理

石造物を中心にテンバコ80箱出土した。令和元年度は、洗浄・注記・接合・復元、令和2年度は復元、令和3年度はトレース、令和元・2年度に石造物の実測とトレースを外部委託した。石造物については、令和4年度中に大蔵寺へ返還した。令和5年度は原稿執筆し、報告書を刊行し大蔵北遺跡の発掘作業を完了した。



第2図 現況測量図 (縮尺 1 / 300)



1:300

第2章 大蔵北遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境 (第3図)

大蔵北遺跡は、福井県敦賀市大蔵に位置する。敦賀市は、福井県のほぼ中央に位置し、周囲を木ノ芽・越美・野坂の各山地と敦賀湾に囲まれた、東西南北各約5kmの扇状を呈する敦賀平野を中心としている。以下敦賀平野の地形について概略的に記述する。

琵琶湖北岸の野坂山地内には、本州大破砕帯の一部を形成する断層・地溝が多数存在し、その一部は野坂断層・木ノ芽断層として敦賀平野南東および西の縁辺に顕著な階段状の断層崖をみせている。平野の形成はこれら断層線に沿った地盤の沈降作用によると考えられる。

敦賀平野に流入する主要な河川は、黒河川・筥ノ川・木の芽川の3河川である。黒河川と筥ノ川は、敦賀市南端の野坂山地内を源とし、筥ノ川敦賀市南東から北流しながら平野内を流れ敦賀湾に注いでいる。黒河川は敦賀市の南から北流し敦賀平野南端で筥ノ川に合流する。木の芽川は、木の芽山地内を源とし、西流しながら敦賀市内中心部で筥ノ川に合流する。これら3河川は平野流入に伴い、黒河川扇状地・筥ノ川扇状地・木の芽川扇状地と呼称される扇状地を平野南部から東部に連続的に形成しており、この一帯は複合扇状地となっている。一方の海側の平野北端部には「気比の松原」として著名な浜堤が形成されている。この浜堤は形成時期を異にする3列の浜堤列からなり、その形成は弥生時代中期以前と考えられている。扇状地と浜堤に挟まれた平野中央部は地表の勾配が緩慢な地域であり、潟湖上を河川堆積物が埋積した三角州低地となっている。このほか、平野東部・西部の出入りの激しい山脚周辺の山麓には、背後の山地の沈降により生じた湿地帯が、また、平野北西部の山麓には、風化岩層により形成された岩錐が、それぞれ特徴的な地形として認められる。このように敦賀平野の地形は大きく分けて、北端海岸線の浜堤・平野中央部の三角州低湿地・平野南および東側山際の扇状地の3つから成り立っている。大蔵北遺跡は、木の芽川扇状地の北側に張り出す丘陵上に立地する。



第3図 敦賀平野の地形分類図 (縮尺 1 / 100,000)

第2節 歴史的環境（第4図）

大蔵北遺跡周辺の遺跡を時代別に概観する。

旧石器時代は、教賀市南西部に位置する野坂山頂でナイフ形石器が発見されているのみである。縄文時代も土器が出土しているが、遺構は確認されていない。浜堤西側にある丘陵斜面で縄文時代中期の土器がある程度まとまって出土している。

弥生時代では、舞崎遺跡（第4図7、以下番号のみ）、中遺跡（13）、吉河遺跡（17）がある。

舞崎遺跡は丘陵上に位置し、平成11・12年に市教委が発掘調査を実施している。調査では、弥生時代中期～後期の住居跡5棟、土抗2基などを検出し、同時代に存在していた高地性集落と考えられる。

中遺跡は木ノ芽川扇状地上に位置し、昭和51・52年に北陸自動車道・教賀バイパス建設に先立ち県教委が発掘調査を実施している。その結果、遺構は溝など少数の検出であったが、後期の弥生土器などが多量に出土した。

吉河遺跡は箕ノ川扇状地上に位置し、昭和56～60年に県埋文が国道8号教賀バイパスに先立ち発掘調査を実施している。その結果、中期から後期にかけての竪穴住居6棟、方形溝墓25基のほか、当時の集落内道路などムラの過半が検出され、土器・石器など多量の遺物が出土した。その他の弥生時代の遺跡は、大蔵遺跡（8）や松原遺跡（2）があり、弥生時代中期の土器が採取されている。

弥生時代～古墳時代の集落は大町遺跡（16）があり、同遺跡は箕ノ川扇状地上に位置し、平成20年と同29年に発掘調査が実施されている。前者は公民館建設に伴い市教委が発掘を実施し、弥生時代後期末から古墳時代初頭の住居跡8棟など検出、同時期の土器が多量に出土した。後者は北陸新幹線建設に伴い県埋文が実施し、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡23棟・掘立柱建物9棟や土抗墓1基などを検出し、同時期の土器や勾玉・管玉などの遺物が出土した。

古墳時代では、中遺跡（13）と吉河遺跡（17）がある。中遺跡は昭和60年の市教委の発掘調査で中・後期の土師器・須恵器が、吉河遺跡では前期の土師器と後期の須恵器が出土しているがともに遺構の検出はみられなかった。

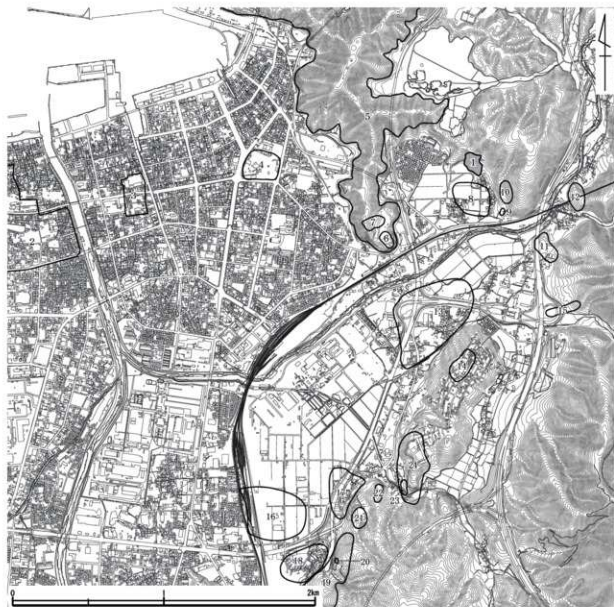
古墳はほぼすべての丘陵上に数多く立地する。

舞崎遺跡（7）では円墳1基と方墳4基が確認された。円墳には葺石が備わっている

明神山古墳群（19）は坂ノ下の背後の尾根上にあり、19基で構成されている。1号墳は葺石を備えた2段築成で、全長19m、高さ5.5mを測る前方後方墳であり、教賀で最も古い首長墓と想定されている。9号墳は横穴式石室をもった全長20m、高さ3mを測る小型の前方後円墳である。これらは古墳時代前期～後期にわたって造営された。

向出山古墳群（24）は通称向出山と呼ばれる独立丘陵に立地する。これまでに古墳時代中期～後期の4基が確認されている。1号墳は標高約70mの丘陵上に立地する、葺石を備えた2段築成で径60m、高さ9mの円墳であり、平野に面する西側に、東西12m、南北18mの方形造り出し部を有している。墳頂にある2基の竪穴式石室から金銅装眉庇付冑をはじめ多種多彩な副葬品が出土しており、5世紀末の首長墓に位置づけられている。3号墳は向出山東南の山麓に築かれた南西に開口する横穴式石室をもつ、径14m、高さ3.7mの円墳である。石室は片袖式で、全長7m、玄室高2.6mを測り、6世紀後葉の築造である。

立河古墳群（11）は井川区東側の山稜尾根先端部に分布する。4基からなる群のうち2号墳は2段築成で葺石を備える全長24m、高さ4.6mの帆立貝形古墳で、4世紀末～5世紀初頭の地域首長墓と見



第4図 周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

- 1 大森北遺跡 2 松原遺跡 3 教賀町奉行所跡 4 気比神宮境内遺跡 5 金ヶ輪天満山城跡 6 舞崎古墳
- 7 舞崎遺跡 8 大森遺跡 9 大樟神社経塚 10 大樟古墳群 11 立洞古墳群 12 深山寺経塚 13 中遺跡
- 14 中村山古墳群 15 山ノ上古墳群 16 大町田遺跡 17 吉河遺跡 18 坂ノ下遺跡 19 明神山古墳群
- 20 坂ノ下中世墓群 21 小谷ヶ洞古墳群 22 吉河古墳群 23 中郷古墳 24 向出山古墳群

られている。

また、明神山、向出山両古墳群のあいだに布留式土器を出土した前期古墳を含む小谷ヶ洞古墳群(24)、さらに向出山、立洞両古墳群のあいだに山の上古墳群(15)などが分布している。

古代では、遺跡数は少なく気比神宮境内(4)で礎石や古瓦が採取されている。

平安時代末から中世の経塚として舞崎遺跡(7)・大樟神社経塚・(9)深山寺経塚(12)がある。

舞崎遺跡では経塚2基を検出し、造営時期が平安時代末と考えられる。

深山寺経塚群は、深山寺集落に西接する丘陵上に位置し、約20基の経塚からなる。明治時代に和鏡と湖州鏡各1面と刀子片が出土している。その後昭和57年に宅地造成に先立ち市教委が7基の経塚を発掘調査した。その結果、経塚群は平安時代末期から室町時代まで造営されていると考えられる。

大蔵神社塚は1999年に大蔵神社境内の切り土断面に甕が露出しているのを発見され、市教委が緊急調査を実施している。その結果、2基の経塚が確認され、銅製経筒が残存していた。造営時期は外容器から鎌倉末期から南北朝にかけてと推測された。

中世では、金ヶ崎天筒山城跡(5)がある。この山城は戦国時代の記述によると天筒山の周囲がほとんど湿地帯であった。

坂ノ下中世墓群は明神山古墳群丑寅山支群が並ぶ尾根上にある。造営時期は室町時代から戦国時代と考えられている。

敦賀町奉行所跡(3)の下層で15世紀後半と16世紀後半の遺構面を確認している。16世紀後半の遺構面では礎石が確認され複数の建物跡が復元されている。

近世では、敦賀町奉行所跡がある。江戸時代に小浜藩の北・南奉行所、北・南代官所、御茶屋等が置かれていた区域で、その以前には敦賀城が存在していたという記録がある。

引用・参考文献

敦賀市教育委員会 2001 『舞崎前山古墳 舞崎道跡』

福井県教育庁理蔵文化財調査センター 2008 『坂ノ下道跡群』 一般国道8号敦賀バイパス関係道跡調査報告書第1集

敦賀市教育委員会 2012 『敦賀町奉行所跡』

敦賀市教育委員会 2013 『深山経塚群』

福井県教育庁理蔵文化財調査センター 2009 『第24回 福井県発掘調査報告会資料 一平成20年度に発掘調査された道跡の報告一』

第3章 遺跡の概要

第1節 基本層序 (第5図)

大蔵北遺跡は木ノ芽川扇状地の扇頂部北側に位置する丘陵の南西に派生する尾根東側に位置する。調査区一帯は調査に入る直前まで墓地および杉林で全体を表土が覆い、石造物等が散在していた。

基本層序は表土を取り除くと地山が見られ、尾根斜面の平坦部で約30cmの盛土の堆積が見られる箇所もある。谷部では表土下に1m以上の砂礫土が堆積している。尾根西側の裾部平坦部では表土・盛土・斜面崩落土の順で堆積し、盛土は約1mありその下層の崩落土は1m以上である。この箇所では表土直下と盛土下の2面で遺構面を検出したが、それ以外は遺構面1面であった。

第2節 遺構分布 (第6図)

尾根頂部平坦部に近世墓地が造営されており、その周囲に石造物を伴う配石・集石群が見られる。また、その尾根の南・東・西斜面を削り出した平坦部にも石造物を伴う集石群が見られる。この尾根の西へ離れた平坦部では火葬施設に関連する遺構を検出した。

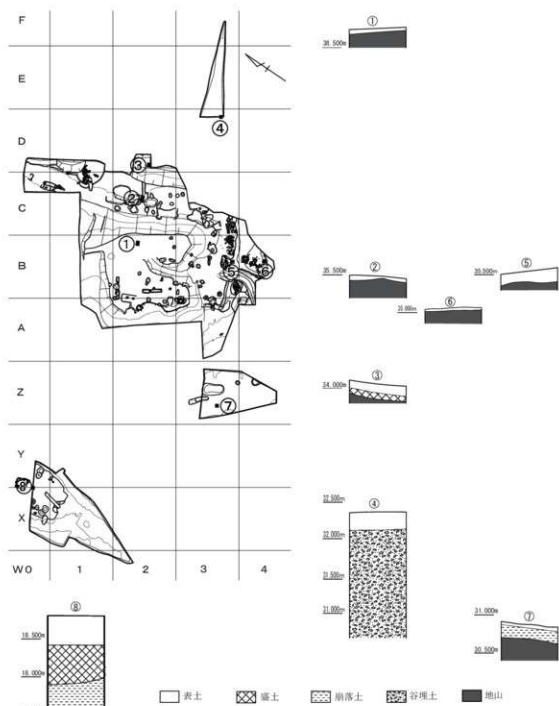
今回の調査で集石を伴う遺構を下記のように分類を行った。

まず、人骨の有無、木棺などの埋葬施設の痕跡の有無により墓の可否を判断した。

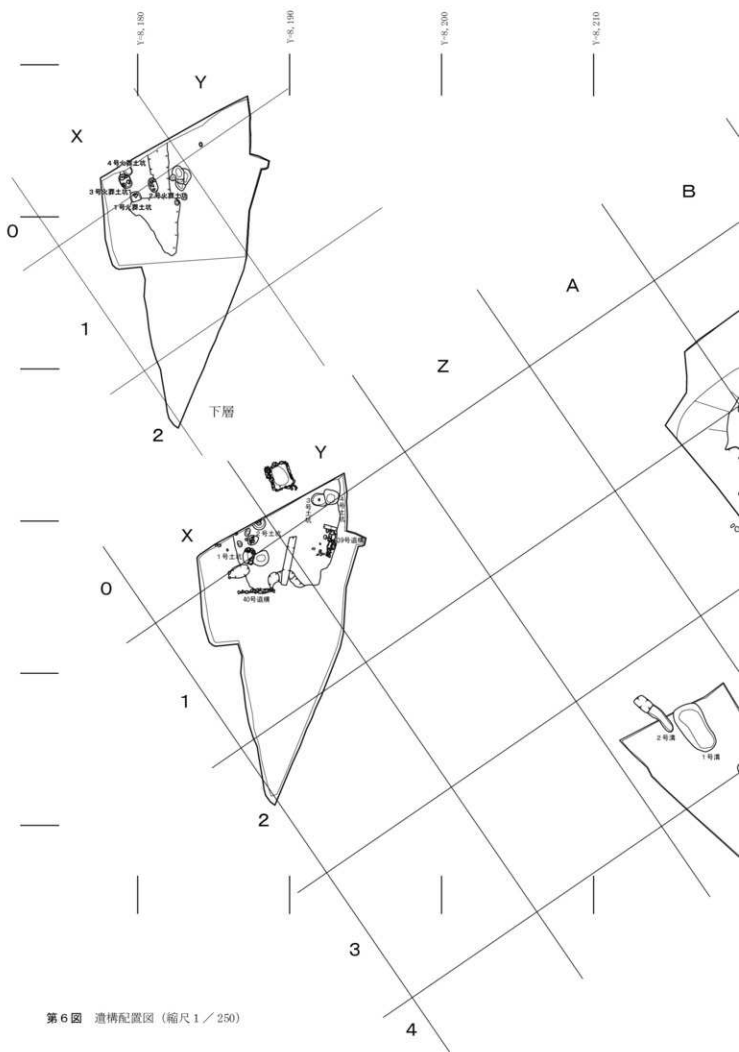
次に、墓ではないが集石・配石・石造物等が見られるものをそれぞれ、集石遺構・配石遺構・墓標遺構と呼称する。また、土坑内から焼土および一定量以上の炭化物を検出し、その場所において火葬行為が行われたことが疑われる物については本来的な意味で埋葬施設とは異なるため火葬施設とする。

第3節 遺物出土状況

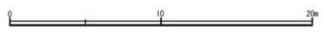
中世墓に伴う遺物は、石造物が主である。石造物は、一石五輪塔、組み合わせ式五輪塔の部材で、空風輪、火輪、水輪、地輪と宝篋印塔、板碑、石仏等がある。石造物の石材は安山岩が多く、花崗岩、笏谷石がわずかにみられる。



第5図 基本層序



第6図 遺構配置図 (縮尺 1/250)



第4章 遺構と遺物

第1節 遺構 (第7～15図)

遺構番号は、区画墓・配石遺構・集石遺構・墓標遺構関係なく1からの通し番号であり、整理段階で前述した各遺構を再検討したため欠番がでた。また、一部の遺構には枝番をつけたものもある。

I 集石・配石

1号遺構 (第8図) C-0・1に位置する。地表上に河原石による配石を施し、平面形は長方形を呈す。下部から骨片は出土していない。

2号遺構 (第7図) D-1に位置する。地表上に河原石を一边約1.50mの「口」の字状に配石を施す。その直下で土坑を検出し、径約1.00mの円形を呈し、深さ0.83mを測る。土坑は谷埋土中に構築され骨片は出土しなかったが、形状から墓と推察される。時期は、出土遺物がないため不明である。

5号遺構 (第7図) C-2に位置し、地表上に河原石が認められた。その直下に浅い落ち込みが検出されたが、骨片は出土していない。

8号遺構 (第7図) C-2に位置し、地表上に河原石や石造物片が認められた。その直下に浅い落ち込みが検出されたが、骨片は出土していない。

10号遺構 (第7図) C-2に位置し、地表上で玉石上に河原石や石造物が認められ、その直下から土坑が検出された。土坑は地山を掘り込んで構築され、長軸2.24m、短軸1.62m、深さ0.38mを測り、平面形は楕円形を呈す。土坑の埋土から骨片は出土していない。

12号遺構 (第7図) C-3・4に位置し、地表上で河原石のまとまりが3カ所で認められたため、12-1から3に分けた。12-1は河原石数個が配され、直下かに浅い落ち込みが認められたが、骨片は出土していない。12-2は河原石数個が配され、近辺に板碑が倒れた状態で検出した。河原石の直下で浅い落ち込みが認められたが、骨片は出土していない。12-3は河原石2個が配されその直下に土坑を検出した。土坑は地山を掘り込んで構築され、長軸0.68m、短軸0.53m、深さ0.33mを測り、平面形は円形を呈す。土坑埋土からは骨片は出土していない。

15号遺構 (第8図) B・C-4に位置し、地表上で河原石と瓦が認められ、その直下から土坑が検出された。河原は土坑上面に敷かれており、その上に板碑が立った状態で検出された。土坑は、径約0.60m、深さ0.33mを測り、平面形は円形を呈し、骨片は出土しなかった。

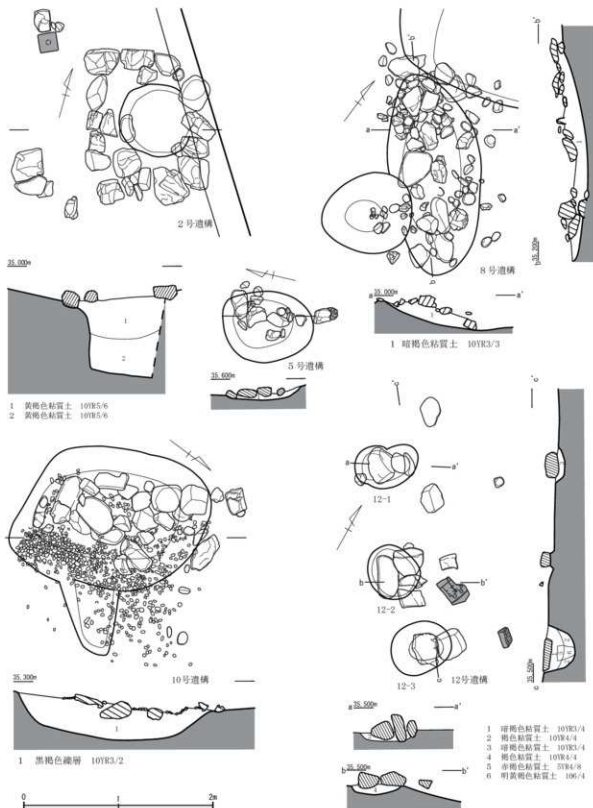
33号遺構 (第8図) C-3に位置し、地表上で河原石が認められ、その直下で土坑が検出された。集石は土坑内へ落ち込んでおり、土坑に伴うものと考えられる。土坑は長軸0.86m、短軸0.58m、深さ0.70mを測る、平面形が円形を呈す。地山を掘り込んで構築され、骨片は出土しなかった。

29号遺構 (第8図) B-2に位置し、河原石が口の字状から崩れた状態で認められ、その下部で土坑を検出した。土坑は、径約0.40m、深さ0.34mを測り、平面形は円形を呈す。埋土からは骨片は出土しなかった。

II 墓標遺構

3号遺構 (第9図) C-1に位置し、地表上に五輪塔火輪1点、同地輪3点が散在しており、下部から骨片は検出されなかった。

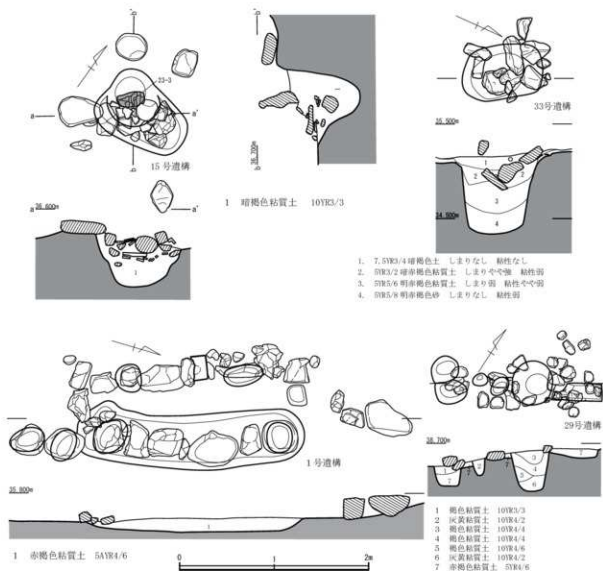
4号遺構 (第9図) C-1・2に位置し、河原石や石造物で不揃いな長方形の配石を施す。北隅で板碑が倒れた状態で検出された。下部から骨片は出土していない。



第7図 遺構実測図1 (縮尺1/40)

6号遺構 (第9図) C-2に位置し、地表上に拳大の河原石と石仏が認められた。下部には浅い落ち込みが検出されたが、骨片は出土していない。

7号遺構 (第9図) C-2に位置し、地表上に拳大の河原石とともに石仏が認められ、石仏は破損



第8図 遺構実測図2 (縮尺1/40)

している。その直下で土坑を検出したが、骨片は出土していない。

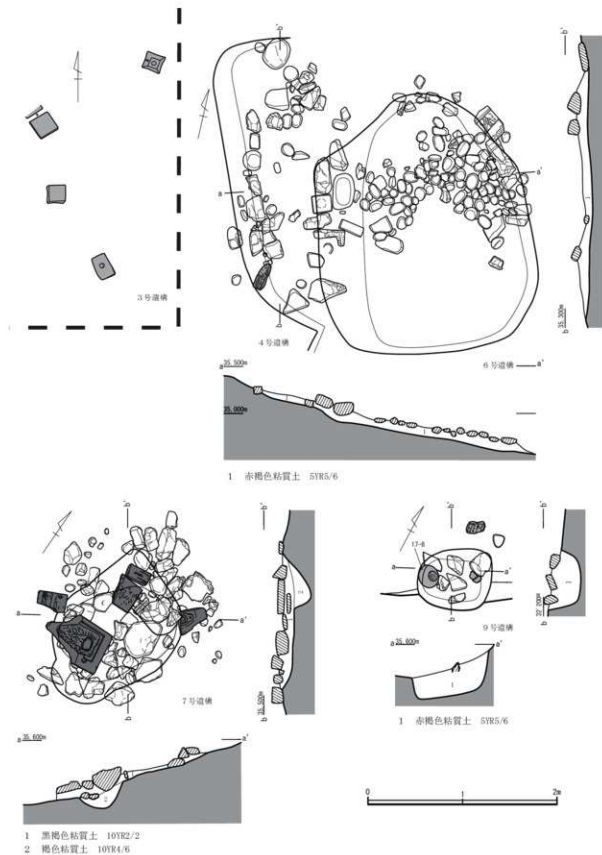
9号遺構 (第9図) C-2に位置し、土坑上面で、五輪塔空風輪・水輪や河原石が散乱していた。土坑は、長軸0.78m、短軸0.65mの平面形が隅丸方形をし、深さ0.56mを測る。周辺の状況から土坑上面に五輪塔が立っていたとは考えられず、また土坑覆土から骨片は出土していない。

11号遺構 (第10図) C-3・4に位置し、玉石や河原石とともに五輪塔の各部が散乱する。北西で配石の一部が見られることから玉石が残存する箇所および南端で配石が認められる箇所には石造物が建っていた可能性が考えられる。

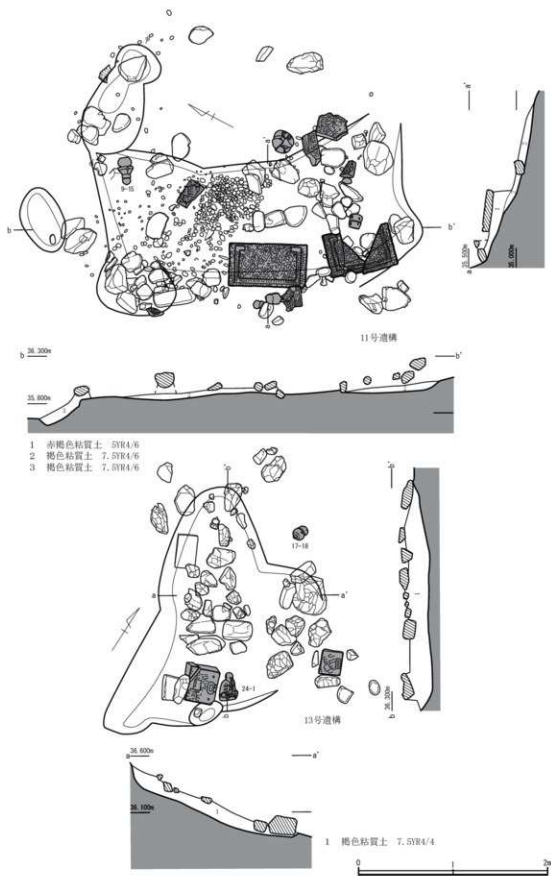
13号遺構 (第10図) C-4に位置し、石仏・空数輪・台座や河原石が散乱する。その南端で石仏と台座が隣接している。下部で土坑状の落ち込みが検出されたが、骨片は出土していない。

14号遺構 (第11図) C-4に位置し、石造物の配置から14-1から3にわたる。

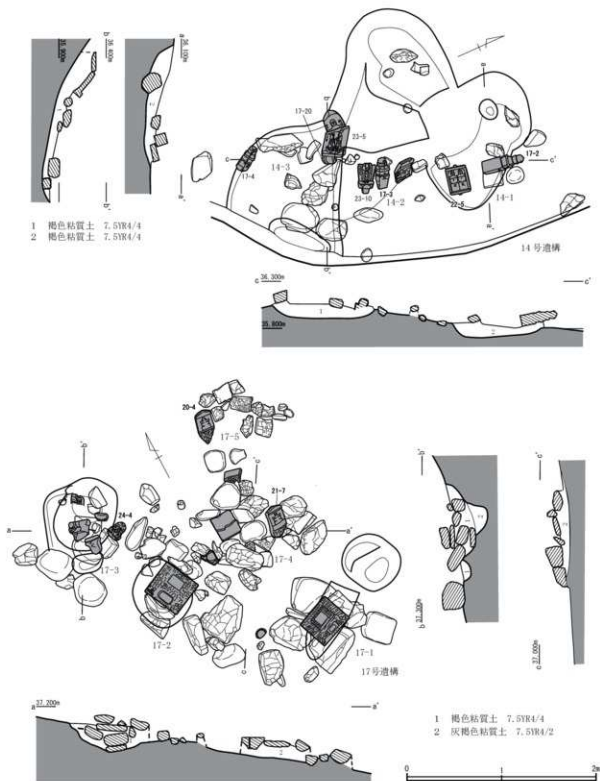
14-1は一石五輪塔と板碑が倒れた状態で検出された。下部で土坑を検出したが、骨片は出土していない。14-2は一石五輪塔・板碑2体が倒れた状態で検出された。下部構造は検出されなかった。14-3は一石五輪塔と板碑が倒れた状態で検出された。直下で土坑を検出したが、骨片は出土していない。



第9図 遺構実測図3 (縮尺1/40)



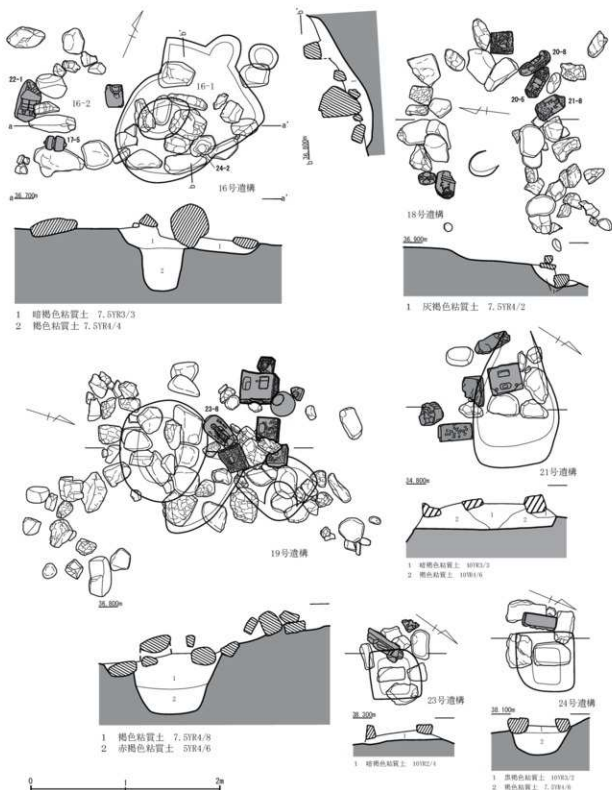
第10圖 遺構実測図4 (縮尺1/40)



第11図 遺構実測図5 (縮尺1/40)

16号遺構 (第12図) B-3に位置し、石造物や河原石が散乱している。石造物の配置から16-1・2に分けた。

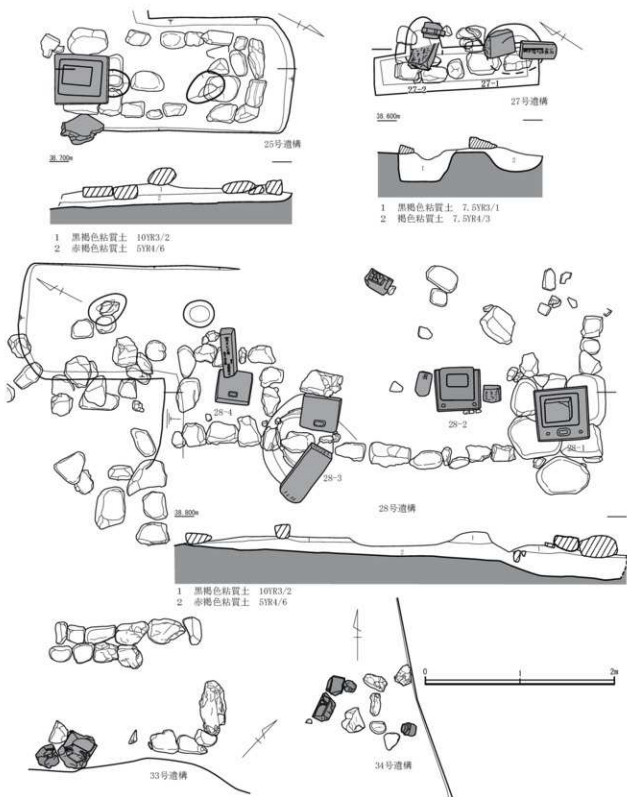
16-1は石仏が立った状態で検出され、その直下で土坑を検出したが、骨片は出土されなかった。16-2は倒れた状態の板碑2体と近隣に五輪塔空風輪が検出されたが、下部からは骨片は出土していない。



第12図 遺構実測図6 (縮尺1/40)

17号遺構 (第11図) B-3に位置し、地表上に河原石や石造物が散乱している。石造物の配置から17-1から5に分けた。

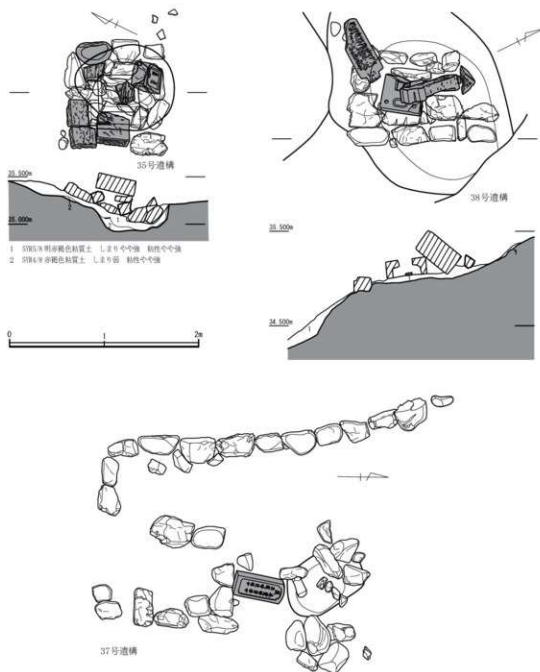
17-1は北端にあり、扁平な河原石が方形に配されたその上に台座が座っている。17-2は扁平な河原石の上に台座が座っている。その直下に、浅い落ち込みが人骨は検出されなかった。17-3は土



第13図 遺構実測図7 (縮尺1/40)

坑底面から扁平な河原石を数段据えその上に石仏が置かれていたと推察する。17-4は河原石がコの字状に配されていたと考えられ、その中央に板碑がやや傾いた状態で検出された。17-5は河原石が散乱する近辺で板碑が倒れた状態で検出された。これらの下部から骨片は出土していない。

18号遺構 (第12図) B-3に位置し、コの字状に河原石が配石されている。その南東隅に板碑2体と



第14図 遺構実測図8 (縮尺1/40)

台座が、その対角の北西隅に板碑2体を安置されていた。下部からは骨片は出土していない。

19号遺構 (第12図) A・B-3に位置し、土坑上に河原石が認められ、その北側に板碑・水輪・台座が散乱していた。下部からは骨片は出土していない。

21号遺構 (第12図) A・B-2・3に位置し、板状の石造物上に方形に河原石が配石されその中央に台座が配置されていた。下部から骨片は出土していない。

23号遺構 (第12図) A-2に位置し、崩れかけた方形状に河原石が配されその中央に板碑が横倒しの状態で検出した。下部からは骨片は出土していない。

24号遺構 (第12図) A-2に位置し、長方形をした河原石4石を方形に配し、中央に板碑を置く。その直下に1辺約0.6m四方で、深さ0.23mの土坑を検出したが、骨片は出土していない。

25号遺構 (第13図) A-1に位置し、河原石を長方形に配し、南端には表面が平らな河原石を敷き墓石が座っている。下部からは骨片は出土していない。

27号遺構 (第13図) B-2に位置し、河原石をL字状に2段配しており、27-1・2に分けた。27-1は河原石を5・6石をL字に配しその上に台座が座り、竿石が倒れた状態で検出された。その直下で径0.6m、深さ0.25mの土坑を検出したが、骨片は出土していない。27-2は河原石6石をL字状に配し、板碑が倒れた状態で検出した。その直下で径約0.6m、深さ0.3mの土坑を検出したが、骨片は出土していない。

28号遺構 (第13図) B-2に位置し、河原石が横L字状に配置され、その先端に口の字状に配された河原石が付随する。石造物の配置から28-1～4に分かれる。

28号-1～3は横L字内にある。28-1は、L字の角に扁平な石を置きその上に石造物が座っている。28-2は28-1の北に隣接し、石造物が座り、その両脇に加工痕のある安山岩がある。28-3はL字の先端部に石造物が倒れた状態で検出された、その北に28-4がある。28-4は河原石が方形に配され、その中央に台座が座り、石造物が倒れていた。いずれも下部から骨片は出土していない。

33号遺構 (第13図) B-3に位置し、河原石がコの字状に配され、北側の配石は2列である。南東隅に南に石仏が倒れて検出された。下部から骨片は出土していない。

34号遺構 (第13図) B-3に位置し、地表面に空風輪、火輪、水輪が散在していた。下部から骨片は出土していない。

35号遺構 (第14図) C-3に位置し、河原石等で約1.00m四方の方形に配された上面で、板碑が安置していた。その下部で長軸1.08m、短軸0.90m、深さ0.26mを測り、平面形が卵形を呈す土坑を検出したが、下部から骨片は出土していない。

37号遺構 (第14図) B-4に位置し、延長3.80m、幅2.00mのL字状でその南側に1辺1.10mの口の字の配石を伴う。口の字状の配石の頂部から北側へ倒れた状態の板碑を検出した。下部から骨片は出土していない。

38号遺構 (第14図) B-4に位置し、1.20m×1.00mの方形をした配石の中央部に板碑が倒れた状態で検出した。下部から骨片は出土していない。

III 火葬土坑

1号火葬土坑 (第15図) X-0・1に位置し、約0.70m、深さ0.30mの円形をした土坑で底面に山石が据えられていた。山石は焼けた痕跡があり覆土には焼骨が混入していた。

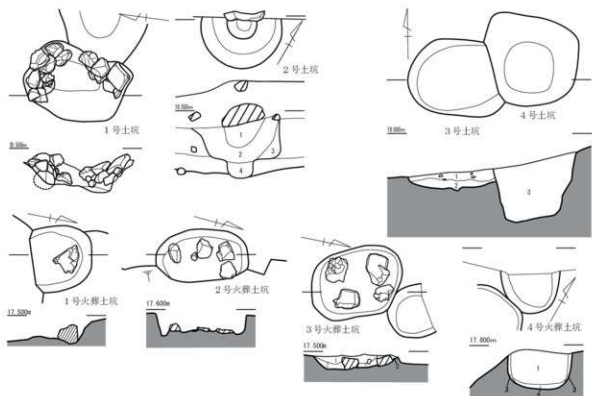
2号火葬土坑 (第15図) X-0・1に位置し、長軸1.00m、短軸0.55m、深さ0.22mを測る平面形が楕円形の土坑で底面に山石が据えてあり、底面の縁には溝が全周している。山石は焼けており、覆土には焼骨が混入していた。

3号火葬土坑 (第15図) X-0に位置し、長軸1.04m、短軸0.55m、深さ0.16mの平面形が隅丸方形の土坑で底面に山石が据えてあり、覆土には焼土・炭化物・焼骨が混入し、底面近くでは焼骨が多く見られた。

4号火葬土坑 (第14図) X-0に位置し、長軸0.62m、短軸0.42m、深さ0.40mで調査区境のため半円形を呈した土坑で側面は焼けており、底面付近の覆土には炭化物や焼骨が混入していた。

IV 土坑

1号土坑 (第15図) X-0・1に位置し、長軸1.18m、短軸0.82m、深さ0.30mで、平面形は隅丸



2号土坑

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土 しまりやや弱 粘性やや弱 炭化物少量混 焼骨少量混
- 2 10YR2/3 黒褐色粘質土 しまりやや弱 粘性やや弱 炭化物少量混 焼骨少量混
- 3 10YR5/6 黄褐色粘質土 しまりやや弱 粘性やや強 炭化物中量混
- 4 10YR4/4 褐色粘質土 しまりやや弱 粘性やや強 炭化物少量混

3号・4号土坑

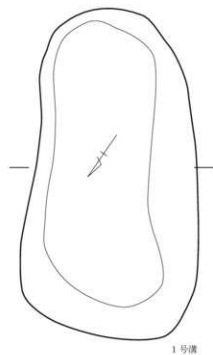
- 1 10YR4/3 に高・黄褐色粘質土 しまりやや弱 粘性やや強 炭化物少量混 焼骨出土
- 2 10YR2/2 黒褐色粘質土 しまりやや弱 粘性やや弱
- 3 10YR4/4 褐色粘質土 しまり弱 粘性強 焼骨少量混

3号火葬土坑

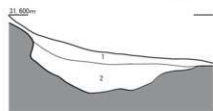
- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土 しまりやや弱 粘性強 炭化物中量混 焼土少量混
- 2 10YR4/4 褐色粘質土 しまりやや強 粘性やや強 炭化物多量混 焼土少量混 焼骨多量混

4号火葬土坑

- 1 7.5YR4/6 褐色粘質土(黄色っぽい) しまりやや弱 粘性強 炭化物少量混
- 2 10YR3/4 暗褐色粘質土 しまり弱 粘性やや強 炭化物と焼骨混在
- 3 7.5YR5/8 明褐色焼土



1号溝



2号溝



1号溝

- 1 10YR3/3 暗褐色粘質土 表土
- 2 7.5YR4/6 褐色粘質土 しまり極弱 粘性やや強

2号溝

- 1 10YR2/3 黒褐色粘質土 しまり弱 粘性弱 表土
- 2 10YR4/4 褐色粘質土 しまりやや弱 粘性やや弱
- 3 10YR4/4 褐色粘質土 しまりやや弱 粘性やや弱



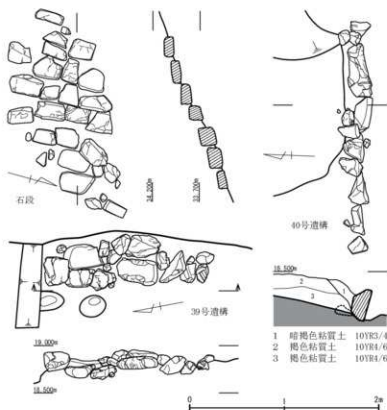
第15図 遺構実測図9 (縮尺1/40)

方形を呈す。底面に横L状に山石が据えてある。出土遺物はなく、時期は不明である。

2号土坑 (第15図) X-0に位置し、調査区にあり、径約0.90mの円形を呈し、深さ0.32mを測る。底面中央に深さ0.15mの小坑を伴う。出土遺物はなく、時期は不明である。

3号土坑 (第15図) Y-0に位置し、径約0.80mの平面形が円形を呈し、深さ0.18mを測る。覆土には炭化物や焼骨が少量混じる。東縁辺で4号土坑に切られている。出土遺物はなく、時期は不明である。

4号土坑 (第15図) Y-0・1に位置し、長軸0.98m、短軸0.80mの平面形が方形を呈し、深さ0.77mを測る。覆土に少量の焼骨が混じる。出土遺物はなく、時期は不明である。



第16図 遺構実測図10 (縮尺1/40)

V 溝

1号溝 (第15図) Z-3に位置し、延長3.00m、最大幅1.90m、深さ0.45mを測る。断面形は東側は直に立ち上がり、西側は底面付近から中間付近までは傾斜がきつく、そこから肩までは緩く立ち上げる。出土遺物はなく、時期は不明である。

2号溝 (第15図) Z-3に位置し、延長2.00m、最大幅0.70m、深さ0.17mを測る。断面形は逆台形である。出土遺物はなく、時期は不明である。

VI その他の遺構

石段 (第16図) 尾根東側斜面平坦部の下に位置し、河原石の平坦面を表面に向け、1列3・4石を10cmの段差をつけ数段配置している。

39号遺構 (第16図) Y-1に位置し、西斜面平坦部に位置し、河原石を延長約1.80mで配している。東側は調査区外となっているため全体像は不明である。

40号遺構 (第16図) 西斜面平坦部に位置し、延長1.70mで1列に配した河原石を境にその北側は盛土となっている。このためこの石列は、土留め用の石垣と考えられる。

第2節 遺物(第17～24図)

遺物は、石造物が大半で土器類は少量であり、かつ小片で図化できなかつた。そのため、石造物が主の説明となり、近世のものも一部含まれている。

石造物としては、五輪塔、宝篋印塔、板碑などが出土している。

I 五輪塔(第17図)

第17図1～14は一石五輪塔であり、2～14は各部位の側面に梵字が刻まれている。

1～5は空風輪から地輪まで残っている。2の地輪には、梵字の下に「永徳二年 妙□ 八月五日」の紀年銘が刻まれている。3の地輪には梵字左に「難カ阿卡」の文字が刻まれている。4の地輪には、梵字右に「法果カ」の文字が刻まれている。5の地輪下部にホゾがあり、梵字右に「□□禪定門」、左側に「享祿三年」の文字が刻まれている。6は空風輪から水輪が残されたもので、各部側面に梵字が刻まれている。7は空風輪が残されたもので側面に梵字が刻まれている。8は火・水輪が残されたもので、側面に梵字が刻まれている。9は風輪から地輪が残されたもので、風・火輪の一部を欠く。地輪側面の左端部に、「元龜元カ□□月カ廿三日」の文字が刻まれている。10は火輪の一部と水・地輪が残されたもので、地輪には「寛永十酉癸歳 無カ権カ律師光慧 成等 成覺カ 十一月廿三日」の文字が刻まれている。11～14は地輪が残されたものある。11の地輪側面には、梵字右に「妙道カ禪定尼」、左に「大永六年カ十月八カ日カ」の文字が刻まれている。12の地輪側面には、梵字の下に「元和九稔 妙貞カ信女 十二月廿四カ日」の文字が刻まれている。13の地輪側面には、梵字の下に「寛永八辛未年大花カ国カ奉為権カ律師俊カ全大善カ祿カ 佛□ 十一月四日歌カ白」の文字が刻まれている。14の地輪側面には、梵字の下に□□・戌カ 崖カ月善カ□禪定尼 七月十九日」の文字が刻まれている。

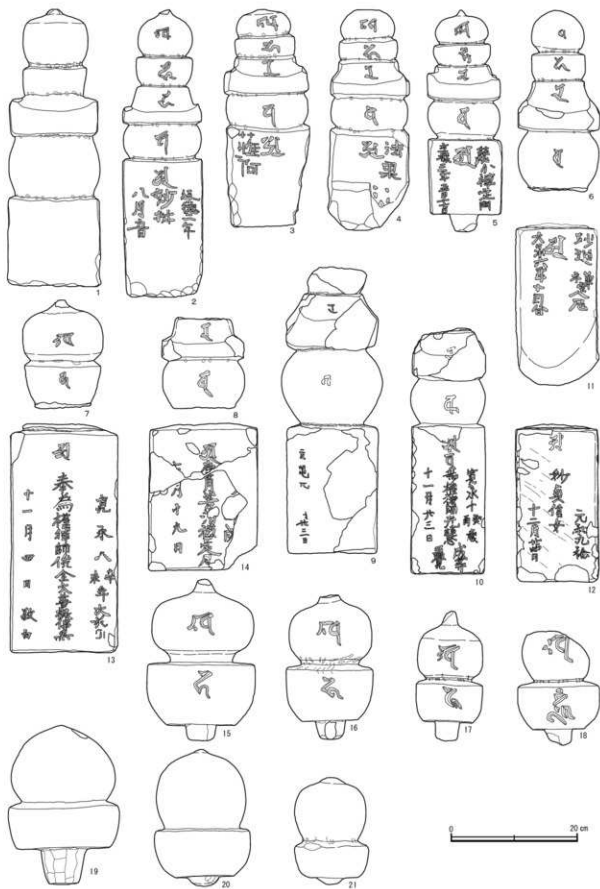
第17図15～第19図14は、組み合わせ五輪塔である。

第17図15～21は、空風輪で風輪下部にホゾがある。15～18は空風輪側面に梵字が刻まれている。

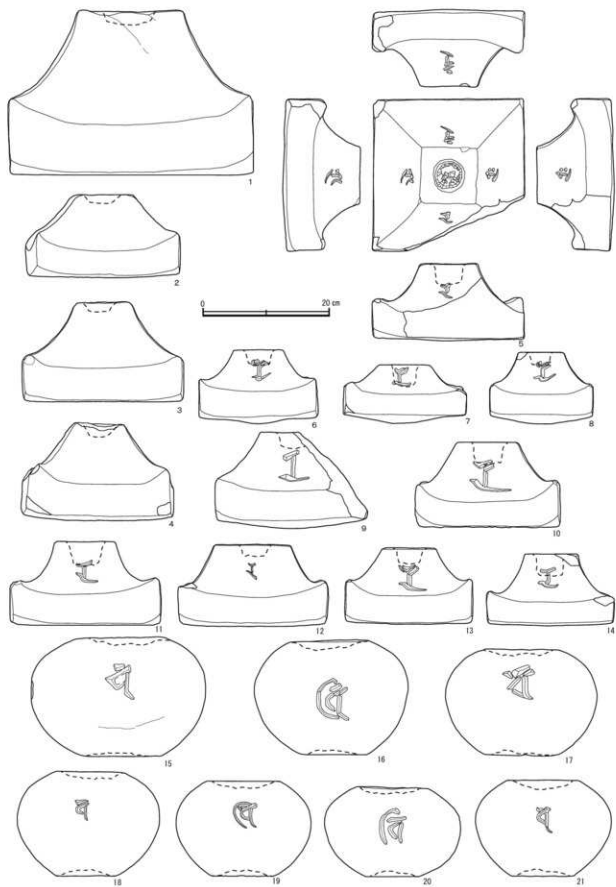
第18図1～14は火輪で屋根頂部にホゾ穴がある。1は大型品である。1～4・10～14の底面はほぼ平らであるが、5～8の底面は膨らむ。5～14は側面に梵字が刻まれており、特に5は4側面に梵字が刻まれている。正面が「ラ」、右面が「ラー」、裏面「ラン」、左面が「ラク」である。

第18図15～21、第19図1・2は水輪で、上・下部にホゾ穴がある。15～21は側面に梵字が刻まれている。第19図2は大型品であり、火輪の第18図1とセットとなるであろう。

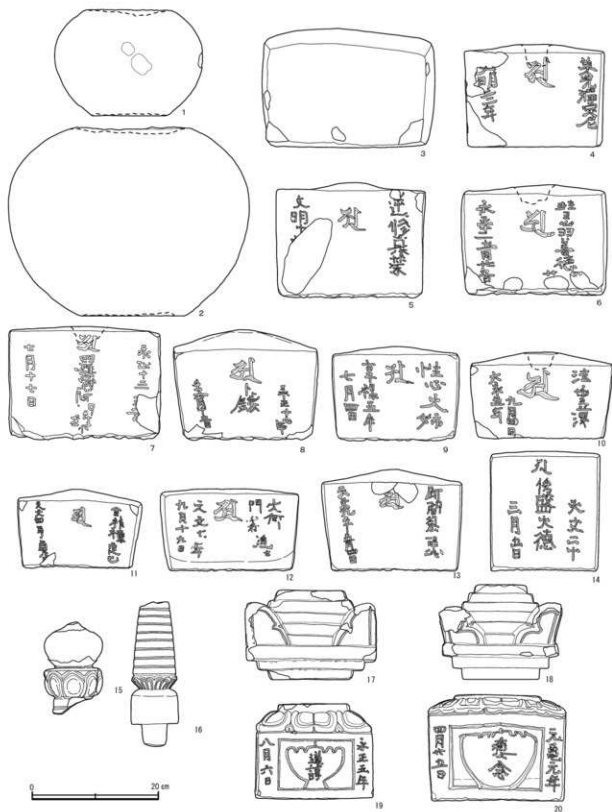
第19図3～14は地輪で、3以外は側面に梵字と紀年銘が刻まれており、4・6・7・10の上面にホゾ穴をもつ。14は他に比べ縦長の形態である。4は梵字右に「英光禪定尼」、同左に「文明二二年」の文字が刻まれている。5は梵字右に「逆修真カ榮」、同左に「文明十□」の文字が刻まれている。6は梵字右に「慧カ翁カ善徳□」、同左に「永正十二月廿五日」の文字が刻まれている。7は梵字下に「永正十三□子カ□」／「□□阿闍カ梨カ」／「七月十七日」の文字が刻まれている。8は梵字右に「永正十七年」、同下に「鏝カ」、同左に「壬六月十五日」の文字が刻まれている。9は梵字右に「性心大師」、同左に「享祿五年 七月四日」の文字が刻まれている。10は梵字右に「法□□法」、同左に「大永五年九月四日」の文字が刻まれている。11は梵字右に「全祥カ禪定尼」、同左に「天文四年二月廿カ八カ日」の文字が刻まれている。12は梵字右に「大カ何／門□／道カ□」、同左に「九月十カ九日」の文字が刻まれている。13は梵字右に「阿闍カ梨カ□□」、同右に「天文九年(年)五月四日」の文字が刻まれている。14は梵字下に「天文二十」／「俊カ盛大徳／三月五カ日」の文字が刻まれている。梵字はいずれも地輪が「ア」、水輪が「バ」、火輪が「ラ」、風輪が「カ」、空輪が「キヤ」である。



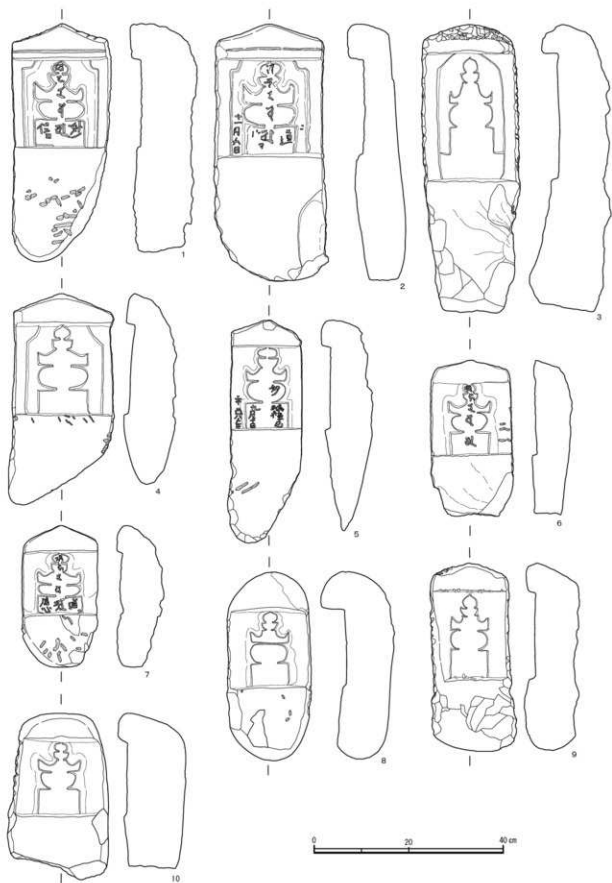
第17圖 遺物実測図1 (縮尺1/6)



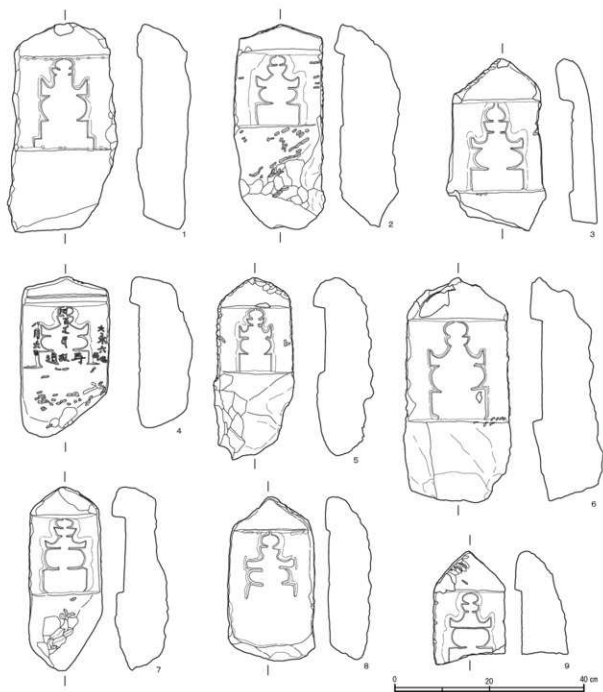
第18圖 遺物実測図2 (縮尺1/6)



第19図 遺物実測図3 (縮尺1/6)



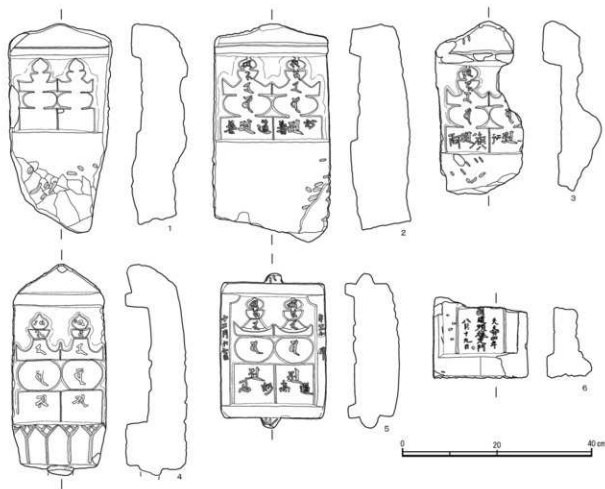
第20圖 遺物実測図4 (縮尺1/8)



第21図 遺物実測図5 (縮尺1/8)

II 宝篋印塔

第19図15～20は宝篋印塔である。15は相輪の宝珠と請花である。16は相輪の九輪・請花・伏鉢であり、伏鉢は無地で底部にホゾをもつ。17・18は笠部で、上・下部にホゾ穴がある。17は上部6段下部3段、18は上部5段下部3段である。隅飾突起は17がほぼ直立し、18はやや外へ開く。隅飾突起の形態はともに2弧輪郭形である。19・20は基礎で、上部段形に反花を刻み、側面に一区画の格狭間をもつ。19の格狭間内に「道諱」、格狭間右に「永正五年」、同左に「八月六日」の文字が刻まれている。20は格狭間内に「□念」、格狭間右に「元亀元年」、同左に「四月廿五日」の文字が刻まれている。



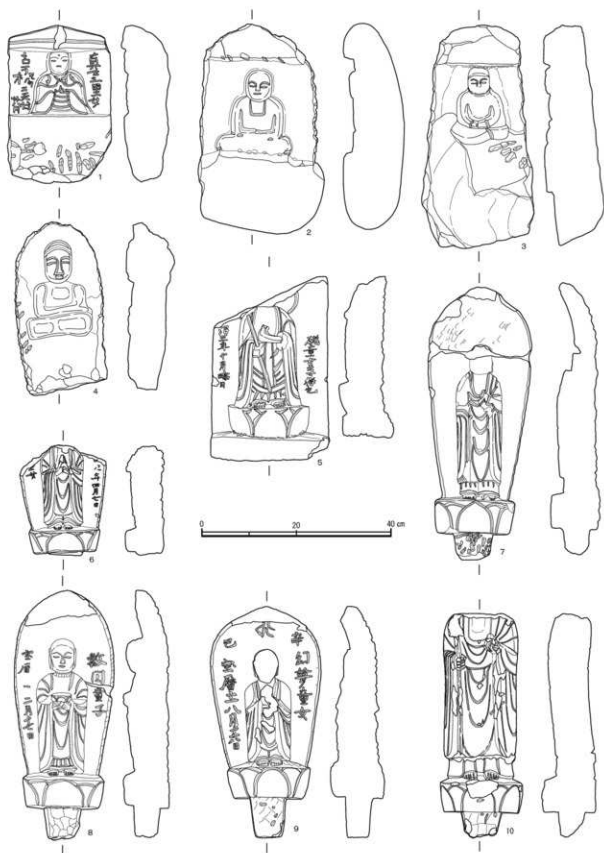
第22図 遺物実測図6 (縮尺1/8)

III 板碑

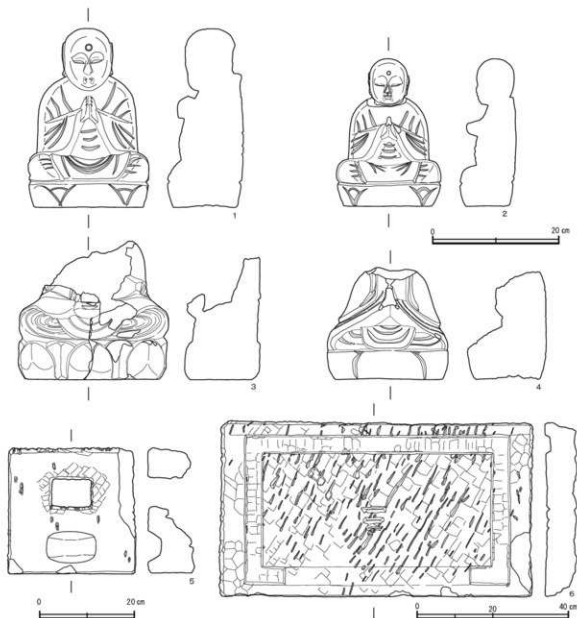
板碑には五輪塔板碑・石龕像板碑・如来座像板碑などがある。板碑は、長方形の原石の一端を削り落として三角の頂部を造り、図像を刻む碑面を一段掘り下げ頂部と基部より低くしている。碑面に五輪塔1基を刻むのが五輪塔板碑で、如来像を刻むのが如来座像板碑である。五輪塔板碑には、碑面に五輪塔1塔を刻む単塔式五輪塔板碑と同面に五輪塔2塔を刻む双塔式五輪塔板碑がある。

第20図1～第21図9は、単塔式五輪塔板碑である。第20図1～4は碑面の周囲に額を有しており、1・2は頂部に1本の条線を刻む。第20図5～10は碑面に五輪塔を所刻する際に周囲を掘り残した結果が額状になったものである。第21図1～3は碑面の五輪塔を線刻で表現している。第21図4～9は碑面の五輪塔が周囲より浮かび上がっているものである。

第20図1・2・6・7・第21図4の五輪塔に地輪から上へ「ア」・「バ」・「ラ」・「カ」・「キヤ」の梵字が刻まれている。第20図1の五輪塔地輪には、梵字右に「妙」、同左に「信」の文字が刻まれている。第20図2の五輪塔地輪には、梵字右に「道」、同左に判読できないが文字があり、額の外に「十一月九日」と文字が刻まれている。第20図5の五輪塔水輪右寄りには、「妙」、地輪には「珠カ摩カニ 九月十日」、地輪の左に「永正八年カ」の文字が刻まれている。第20図7の五輪塔地輪には、梵字右に「道」、同左に「應カ」の文字が刻まれている。第21図4は頂部に1本の条線を刻み、五輪塔地輪の梵字右に「尊カ」、同左に「道」、五輪塔右に「大永六年」、同左に「八月六日」の文字が刻まれている。



第23図 遺物実測図7 (縮尺1/40)



第24図 遺物実測図8 (縮尺1/6・1/8・1/10)

第21図8は他の板碑のように碑面より基部が突出していない。第21図9は他の板碑が陽刻されていたのに対し唯一陰刻で五輪塔を描写している。

第22図1～4は双塔式五輪塔板碑である。1・2は碑面に五輪塔を所刻する際に周囲を掘り残した結果が額状になったもので、頂部に1本の条線を刻む。3・4は碑面の五輪塔が周囲より浮かび上がっているもので、頂部に1本の条線を刻む。

2～4は碑面の五輪塔2塔に梵字が刻まれており、梵字は単塔式五輪塔板碑と同様である。2は右側五輪塔地輪の梵字右に「妙」、同左に「善」、左側五輪塔地輪の梵字右に「道」、同左に「善」の文字が刻まれている。3の右側五輪塔地輪の梵字左側に文字が刻まれているが判読不明である。左側五輪塔地輪の梵字右側に「廣ヵ」、同左に「阿」の文字が刻まれている。4は基部に蓮華が線刻され、底面にホゾをもつ。

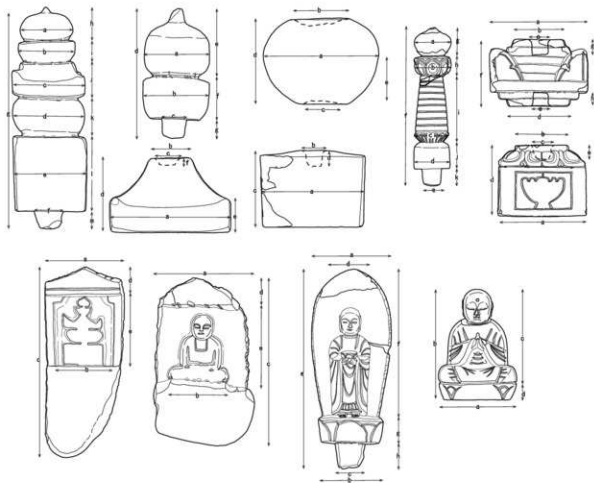
第22図5は石籠式板碑である。上部のホゾに屋根が、下部のホゾに基礎が付くとみられる。碑面には額を有し、2塔の五輪塔が線刻されている。両五輪塔の各部位には梵字が、右の五輪塔地輪には「道／高カ」、同左には「妙忍カ」、また額縁右に「永正十〇年カ」、同左に「十二月廿七日」の文字が刻まれている。

第22図6は上記の板碑とは異なる形態の板碑で、厚さも薄い。底面付近の裏面はやや膨らませている。碑面縁に数cmの額をめぐらし、額内に五輪塔が線刻されている。その五輪塔地輪には梵字の下に「天文廿四年／道順禪定門／八月十九日」の文字が刻まれている。

第23図1～3は如来座像板碑である。板碑の形態は五輪塔板碑と同じで、凶像として阿彌陀如来座像を刻む。1は座像右に「真廿童女」、同左に「享祿二天八月廿八日」の文字が刻まれている。

IV 石仏

第23図4～10は石仏である。4は如来座像が浮き彫りされた石仏である。5は蓮華座に立つ地藏菩薩が浮き彫りされている。頭部を欠が光背に丸く筋彫りされているようである。右手に錫杖を持つ。地藏菩薩右に「〇童女〇〇也」、同左に「(欠)〇三年十月晦日」の文字が刻まれている。6～9は舟形石仏で蓮華座に立つ地藏菩薩が浮き彫りされ、底部にホゾをもつ。6は地藏菩薩に「〇九カ年四月七日」、同左に「童カ女」の文字が刻まれている。8は地藏菩薩右に「教国カ童子」、同左に「宝曆〇二月十七日」の文字が刻まれている。9は地藏菩薩の上に梵字「カ」、同右に「辛カ 幻夢童女」、同左に「己 宝曆十一 八月十六日」の文字が刻まれている。10は蓮華座に立つ地藏菩薩像の丸彫りである。右手に錫



第25図 石遺物計測部位模式図

杖を持ち、左手に宝珠を持つ。

VI 地蔵

第24図1～4は蓮華座に座っている地蔵菩薩像で丸彫りである。1・2は両手を合わせている。3・4は頭部付近を欠いている。

VII その他

第24図5は石仏(第23図7)の台座である。幅26.2cm、奥行き25.2cmの方形を呈し厚さ10.3cmを図る。中央やや奥にホゾ穴をもち、その手前に水鉢がある。石材は笏谷石である。

第24図6は石廟の土台である。幅83.2cm、奥行き46.6cmの長方形を呈し、厚さ9.1cmを測る。縁の内側に溝を彫る際のアタリ線が一部残る。表面にはノミ痕とツル痕がみられる。中央に三を逆にしたような記号ある。石材は笏谷石である。

第1表 一石五輪塔観察表

拝観番号	遺構番号	グリッド	層位	法量 (cm)											石材		
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k		l	m
第17図1				10.4	10.1	14.0	14.4	14.8		43.9	9.1	4.3	6.5	10.0	14.9	安山岩	
第17図2	14			8.7	9.0	12.6	12.4	12.8		44.5	7.4	4.6	6.1	5.3	21.8	安山岩	
第17図3	14			8.6	9.5	12.9	13.0	13.2		34.5	4.2	3.3	6.0	5.4	15.6	安山岩	
第17図4	14			6.5	9.2	12.5	12.2	12.9		35.0	4.5	3.4	6.1	4.8	16.2	安山岩	
第17図5	2			8.4	9.0	11.6	10.4	11.8	4.6	32.4	5.3	2.5	5.6	6.0	12.0	2.8	安山岩
第17図6	11			8.3	8.6	13.0	12.8		(28.8)	6.6	4.6	8.1	9.0			安山岩	
第17図7	11			12.7	12.1					(17.3)	9.7	6.8				笏谷石	
第17図8	24	C 3	表土			13.0	12.9			(14.5)			7.0	7.5		安山岩	
第17図9	19			(10.4)	14.4	16.1	14.6		(45.5)	(4.4)	8.6	12.2	20.3			安山岩	
第17図10		A 3	表土			(11.6)	11.9	11.9	(30.0)			7.6	7.1	23.9		笏谷石	
第17図11		B 2	表土					13.2	(25.7)	—					25.0	安山岩	
第17図12	12							13.9	(24.2)						24.2	笏谷石	
第17図13		A 2	表土		1			17.1	36.3						35.3	笏谷石	
第17図14	6	6	12					(17.3)	(22.4)						22.4	笏谷石	

第2表 五輪塔空風輪観察表

拝観番号	遺構番号	グリッド	層位	法量 (cm)							石材
				a	b	c	d	e	f	g	
第17図15	16		表土	15.1	16.0	4.5	23.8	12.2	9.0	2.3	安山岩
第17図16	4			12.2	12.9	4.5	21.3	10.2	8.6	2.9	安山岩
第17図17			表土	8.6	9.8	3.7	19.2	10.2	6.4	2.8	安山岩
第17図18	13			8.6	12.0	4.0	16.8	7.4	6.8	2.4	安山岩
第17図19		X 0	表土	15.4	16.4	7.0	23.4	11.2	11.1	5.2	安山岩
第17図20	14		表土	13.2	14.2	4.8	20.2	11.6	13.0	1.4	花崗岩
第17図21				10.45	10.8	3.7	15.4	9.9	7.8	0.7	安山岩

第3表 五輪塔火輪観察表

拝観番号	遺構番号	グリッド	層位	法量 (cm)					石材
				a	b	c	d	e	
第18図1		Y 0	1層目遺構面上	19.0	16.5	7.5	26.2	9.7	花崗岩
第18図2				24.6	9.5	3.7	13.2	5.7	花崗岩
第18図3		X 0	表土	25.7	8.3	5.0	15.9	5.5	花崗岩
第18図4		X 0	表土	24.2	7.5	5.0	15.6	7.0	花崗岩
第18図5			表土	24.5	9.2	4.1	12.3	4.5	安山岩
第18図6		D 1		18.9	7.8	4.0	11.7	5.1	安山岩
第18図7	24	A 3	表土	19.6	8.9	3.5	10.1	5.0	安山岩
第18図8	3			22.0	9.5	4.1	15.2	5.9	安山岩

第4章 遺構と遺物

神岡番号	遺構番号	グラッド	層位	法量 (cm)					石材
				a	b	c	d	e	
第189回9	17			23.9	7.4	4.7	15.4	5.2	安山岩
第189回10	3			22.9	9.6	3.9	13.5	7.4	安山岩
第189回11		B 2	表土	23.8	9.4	4.7	13.3	5.8	安山岩
第189回12		B 2	表土	23.8	11.6	3.8	13.0	6.0	安山岩
第189回13				26.4	8.4	4.2	12.1	7.0	安山岩
第189回14			腐土	20.2	8.3	3.4	10.4	5.1	安山岩

第4表 五輪塔水輪観察表

神岡番号	遺構番号	グラッド	層位	法量 (cm)					石材
				a	b	c	d	e	
第189回15	15			27.8	12.0	14.2	19.0	11.0	安山岩
第189回16		X 0		24.4	10.3	12.4	16.2	11.0	安山岩
第189回17	不明		表土	24.3	11.3	11.6	17.0	9.2	安山岩
第189回18	9			22.4	9.0	10.8	16.6	9.9	安山岩
第189回19	13・14間	C 3	地山中	21.5	9.8	11.5	15.1	8.5	安山岩
第189回20	9B12	X 0	遺構腐土	21.6	8.8	11.2	14.4	8.8	安山岩
第189回21		B 3	表土	21.6	10.2	11.3	15.3	9.0	安山岩
第190回1		X 0	表土	23.5	11.5	13.5	16.9	9.4	花崗岩
第190回2		X 0	表土	26.3	15.6	17.9	20.0	18.0	花崗岩

第5表 五輪塔地輪観察表

神岡番号	遺構番号	グラッド	層位	法量 (cm)				石材
				a	b	c	d	
第190回3	8	X 1	表土	27.5	ホゾ穴無	19.0		花崗岩
第190回4			表土	21.6	5.2	16.4		安山岩
第190回5				23.7	ホゾ穴無	15.0		安山岩
第190回6		B 2	表土	21.7	6.2	17.5		安山岩
第190回7		F 3	表土	(24.1)	6.0×5.5	18.0		安山岩
第190回8			表土	23.0	ホゾ穴無	17.6		安山岩
第190回9	集石			19.5	ホゾ穴無	15.0		安山岩
第190回10	14			20.8	5.4	15.8		安山岩
第190回11	21	B 4	表土	19.8	ホゾ穴無	12.5		安山岩
第190回12				22.0	ホゾ穴無	13.0		安山岩
第190回13	石距	B 2		22.3	ホゾ穴無	16.2		安山岩
第190回14	集石			19.3	ホゾ穴無	19.1		安山岩

第6表 宝篋印塔観察表

神岡番号	遺構番号	グラッド	層位	部位	法量 (cm)											石材	
					a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k		
第190回15	11			相輪部	9.3	9.3					6.3	4.5					安山岩
第190回16		X 0		相輪部			9.6	10.0	5.5				(15.6)	7.3	4.8		安山岩
第190回17		B 2	表土	笠部	27.3	15.9	5.1	18.1	4.0	19.0	4.1	3.7					安山岩
第190回18			表土	笠部	26.2	19.5	5.6	16.6	5.5	20.1	5.3	3.9					安山岩
第190回19			表土	基礎	25.0	15.0	6.0	20.2	4.1								安山岩
第190回20			表土	基礎	28.8	18.4	6.4	22.2	4.8								安山岩

第7表 板碑観察表

神岡番号	遺構番号	グラッド	層位	法量 (cm)										石材		
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j			
第200回1		B 2	表土	21.0		50.4	7.8	18.2								安山岩
第200回2	14			24.2		54.4	7.8	19.6								安山岩
第200回3	13			20.7		61.0	6.2	26.6								安山岩
第200回4	17	B 2		21.5		44.6	7.0	18.4								安山岩

第2節 遺物

神田番号	遺構番号	グループ	層位	法量 (cm)							石材				
				a	b	c	d	e	f	g		h	i		
第2005	18	A3	表土	15.8		47.2	5.8	17.0							安山岩
第2006	17			17.4		33.1	5.1	15.0							安山岩
第2007	11			16.1		30.9	6.0	12.35							安山岩
第2008	18			17.9		15.0	15.9	15.6							安山岩
第2009	11			17.8		39.8	6.1	18.2							安山岩
第2010	3			11.3		35.2	6.2	15.2							安山岩
第2101	16	X1		23.3		44.3	7.5	18.9							安山岩
第2102	6			18.9		43.3	6.6	14.6							安山岩
第2103	10			20.7		26.4	8.2	18.6							安山岩
第2104	12			18.9		33.9	6.3	12.7							安山岩
第2105		X1	表土	17.15		38.6	6.5	13.1							安山岩
第2106		X0	表土	22.9		47.6	9.3	20.7							安山岩
第2107	17			15.4		38.9	6.8	15.7							安山岩
第2108	18			18.6		10.1	14.1	13.4							安山岩
第2109	4			15.3		(24.0)	(8.7)	(15.3)							安山岩
第2201	16			22.0		21.8	7.6	14.8							安山岩
第2202	6			(18.6)		(36.6)	(9.3)	(8.2)							安山岩
第2203	11			25.0		46.2	7.0	17.4							安山岩
第2204	24	B3		20.0		44.7	8.1	24.2							安山岩
第2205	14			22.4	17.4	32.6		22.5	6.3	2.2	4.4	2.3			安山岩
第2206	20			20.1	9.50	(17.2)		(9.4)							碧谷石

第8表 石仏観察表

神田番号	遺構番号	グループ	層位	法量 (cm)				石材	
				a	b	c	d		e
第2301	16			21.6	13.2	33.4	10.9	13.3	安山岩
第2302	1	X0		26.65	15.8	44.8	7.65	19.5	安山岩
第2303	15			23.5	12.3	47.2	13.0	16.4	安山岩
第2304	12			19.6	14.0	36.7	9.45	21.0	安山岩
第2305	14			25.2	17.2	(39.0)	2.8	(34.0)	碧谷石

第9表 仏像観察表

神田番号	遺構番号	グループ	層位	法量			石材				
				a	b	c					
第2306	13			8.30	14.95	7.00	9.2	(23.40)	—	4.90	碧谷石
第2307		A3	表土	22.0	17.0	8.6	9.8	57.6	44.6	6.3	碧谷石
第2308	19			11.1	17.2	9.9	10.8	52.8	10.2	5.5	碧谷石
第2309	14			23.4	17.5	9.8	9.7	49.0	9.9	5.9	碧谷石
第2310	14			17.4	17.40	9.6		(47.5)	(34.2)	5.6	碧谷石

第10表 地蔵観察表

神田番号	遺構番号	グループ	層位	法量				石材
				a	b	c	d	
第2401	8			19.2	28.4	24.4	4.0	碧谷石
第2402	16-2			23.7	(22.0)	(15.7)	6.3	碧谷石
第2403	12			16.65	23.35	19.7	5.65	碧谷石
第2404	17			19.15	(17.8)	(13.2)	4.6	碧谷石

第5章 まとめ

大蔵北遺跡で出土した石造物について、検討をしたい

石材は、本遺跡において五輪塔・板碑とも花崗岩製はみられるものの主は安山岩である。同じ教賀市内の本遺跡から南へ約2.5km離れた坂ノ下中世墓群であるが五輪塔は花崗岩製、板碑は安山岩製が主である。次に美浜町の芳春寺山中世墓は五輪塔・板碑とも花崗岩製である。少しはなれるがおい町の山田中世墓群では五輪塔・板碑とも近隣の高浜町日引で産出される安山岩質凝灰岩の「日引石」が主である。同じ教賀市内でも、石造物の石材に違いがあるように若狭地方の中世墓の石造物の石材は、越前地方で笏谷石が主に利用されたといった、特定の石材が利用されていないようである。

次に板碑であるが、形態には五輪塔型・如来座像型・石龕型式などがみられる。本遺跡では五輪塔型の板碑が多数を占めている。坂ノ下中世墓群でも五輪塔型が半数以上を占めているが、芳春寺山中世墓群や山田中世墓群では如来座像型が多数を占めている。他に比べ五輪塔型の割合が高いのは、京都など上方の影響を受けていると考えられる。

最後に紀年銘についてであるが、紀年銘が刻まれた石像物と比較的多く出土している。その内訳は組み合わせ式五輪塔の地輪、一石五輪塔、五輪塔が刻まれ板碑の順になる。

一番古い紀年銘は五輪塔地輪に刻まれたものは、文明4年(1472)であり、この頃には中世墓が造営されて、最後に宝篋印塔の基礎に刻まれた元亀元年(1570)の紀年銘で中世墓が終焉をむかえたものと推測する。

中世墓は、文明4年(1472)から元亀元年(1570)の約100年にわたり、当地で営まれていたことになる。1475年に朝倉氏が越前を平定し、教賀を朝倉氏の親族が支配するようになった。そして、1570年に織田氏の越前攻めによる戦が教賀付近であり、朝倉軍が敗北している。このように、朝倉氏が教賀を支配していた時期と中世墓が造営していた時期と重なることから、石造物の造立に朝倉氏の影響が及んでいたと推量する。

参考文献

教賀市史編さん委員会 1981 「教賀市の小板碑」 教賀市史研究2号

教賀市史編さん委員会 1985 『教賀市史 通史編 上巻』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『滝見古墳群 大飯神社古墳群 山田古墳群 山田中世墓群』

福井県埋蔵文化財調査報告 第75集

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 『芳春寺山中世墓群』 福井県埋蔵文化財調査報告 第92集

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『坂ノ下遺跡群』 一般国道8号バイパス関係道路発掘調査報告書第1集

第11表 紀年銘のある石造物の年代

紀年銘	年代	種類	石材
文明4年	1472	五輪塔 地輪	安山岩
文明10年代	1478~1487	五輪塔 地輪	安山岩
延徳2年	1490	一石五輪塔	安山岩
明応7年	1498	五輪塔 地輪	安山岩
永正5年	1508	宝篋印塔 基礎	安山岩
永正8年	1511	五輪塔所別板碑	安山岩
永正10年代	1513~1521	五輪塔所別板碑	安山岩
永正12年	1515	五輪塔 地輪	安山岩
永正13年	1516	五輪塔 地輪	安山岩
永正17年	1526	五輪塔 地輪	安山岩
大永5年	1525	五輪塔 地輪	安山岩
大永6年	1526	一石五輪塔	安山岩
大永6年	1526	五輪塔所別板碑	安山岩
享祿2年	1529	如来座像板碑	安山岩
享祿3年	1530	一石五輪塔	安山岩
享祿5年	1532	五輪塔 地輪	安山岩
天文4年	1535	五輪塔 地輪	安山岩
天文7年	1538	五輪塔 地輪	安山岩
天文20年	1541	五輪塔 地輪	安山岩
天文24年	1545	五輪塔所別板碑	笏谷石
元亀元年	1570	一石五輪塔	安山岩
元亀元年	1570	宝篋印塔 基礎	安山岩
元和9年	1623	一石五輪塔	笏谷石
寛永8年	1631	一石五輪塔	笏谷石
寛永10年	1633	一石五輪塔	笏谷石